（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　島内（しまうち）　景二（けいじ）

本論文は、『源氏物語』が和歌・物語・日記・紀行・軍記といったジャンルをこえて、後世のさまざまな文学作品に及ぼした影響を、表現に即して精緻に分析することを通して、『源氏物語』の影響というひとすじの水脈によって貫かれた文学史を構想するものである。それとともに、後世の文学作品がそれぞれに『源氏物語』との間に持った独自な関わり方を「響映」という造語によって解析し、その「響映」のありかたから、ひるがえって『源氏物語』の本質を照らし出すことをも試みた、きわめて意欲的な労作である。

全体は四部十六章から成る。第Ⅰ部「影響史研究の方法論」では、『太平記』や室町物語、そして近代の尾崎紅葉の小説などを例に取り上げて、本論文の方法と問題意識を鮮明に提示している。すなわち、島内氏が分析の対象とするのは、『源氏物語』の明示的な引用だけではなく、語彙レヴェルでの一致やシチュエーションの相似性にまで及び、後代の文学作品における創作営為が、『源氏物語』によって規定される一方、またこれと緊張関係を取り結びつつ新たな創造がなされたありようを浮かび上がらせてゆく。また同時に、後代の文学作品における『源氏物語』の解釈を丹念に掘り起こしてゆくことを通して、『源氏物語』という作品が喚起するさまざまな読みの豊かな可能性を開示してゆくのである。

以下、第Ⅱ部「中世日記紀行文学への浸潤」では、阿仏尼の日記『うたたね』、宗久の『都のつと』、耕雲の『耕雲紀行』を、第Ⅲ部「中世から『源氏物語』を読む」では、『無名草子』や室町物語、未刊謡曲集、お伽草子を、第Ⅳ部「近世への浸透」では、上田秋成の『藤簍冊子（つづらぶみ）』と、堀田正敦の主催で文化 11 年(1814)に大名・幕臣・文人たちが詠作した『詠源氏物語和歌』とを対象にして、上記の方法による具体的な分析を試みている。

膨大な作品群の分析の中には、部分的に『源氏物語』との類似の指摘や、後代の個々の作品それ自体の文脈に即した読みの追求において、過不足を感じる場合もなしとしない。書名を「影響史」より、「響映史」とした方が内容により相応しいのではないかという点も指摘できる。しかしながら、「響映史」という用語を用いることで方法を鮮明に打ち出し、従来の『源氏物語』受容史研究とは一線を画す新たな文学史の叙述に成功しており、これまでほとんど顧みられることのなかった中世紀行文や室町物語、お伽草子、未刊謡曲集等の膨大な作品群を精査し、中世における『源氏物語』の解釈や受容のあり方を生き生きと浮かび上がらせた功績は高く評価できる。

よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。